

## 論文

# 熟練看護師のライフヒストリーにおける学習意欲を保持する過程

—自己・非自己循環理論の視点から

村瀬 智子\*, 村瀬 雅俊\*\*

\*日本赤十字豊田看護大学, \*\*京都大学基礎物理学研究所

## The Process of Keeping Sustainable Learning as an Expert Nurse on her Life History —A Qualitative Analysis based on “The Self-Nonself Circulation Theory”

Tomoko Murase\*, Masatoshi Murase\*\*

\* Faculty of Japanese Red Cross Toyota College of Nursing

\*\*Faculty of Yukawa Institute for Theoretical Physics, Kyoto University

Even after graduating from the school of nursing, it is very important for practical nurses to continue their studies. There seem to be difficult problems: What is the essential study of nursing? How do they keep on their studies? In the present paper, the author studied the qualitative analysis of an expert nurse through the interview with the nurse based on her life history. It was found that when the nurse was confronted with great difficulties, she realized her lack of nursing ability in solving the difficulties, which in turn let her study harder and harder. Different studies and different experiences often led to conflicting situations in her mind. The nurse, however, gradually learned how to solve the conflicting situations from her own long-term experiences. The knowledge present in the outside world is useless unless it is applied to real experiences. If there are conflicting situations among different knowledge, it must be a challenging problem how to realize a unifying view from these conflicting situations. It is the internalization of different knowledge present in the outside world that must be the essential process for the nurse to attach the challenging problem, because it can be viewed as a unifying process. Such a unifying process was interpreted in terms of “self-nonself circulation theory” proposed by Murase (2000).

**Keywords** : Sustainable learning, an Expert Nurse, Life history, Qualitative analysis, The Self-Nonself circulation theory

**キーワード** : 継続的な学習, 熟練看護師, ライフヒストリー, 質的分析, 自己・非自己循環理論

---

\*〒471-8565 愛知県豊田市白山町七曲12-33 日本赤十字豊田看護大学

Correspondence concerning this article should be sent to: Tomoko Murase, Japanese Red Cross Toyota College of Nursing, 12-33 Nanamagari, Hakusan-cho, Toyota, Aichi, 471-8565, JAPAN

Email: tmurase@rctoyota.ac.jp

## 1. はじめに

専門職業人としての能力の維持・向上を目指した教育の推進は、学校教育現場で教育を担う教師においても、医療現場で看護を担う看護師においても基本的な課題である。アメリカを代表する成人教育研究者であるメリアムは、『成人学習理論の新しい動向』（メリアム、2010）の中で、次のように述べている。

20 世紀においては、成人学習は、認知的な過程として、つまり、精神が事実や情報をすべて知識へと変換し、知識が次なる行動の変化として観察される過程として理解された。なおも記憶や情報処理に関する研究は特に年齢の機能と関係づけられて続けられているが、近年では、学習は、身体、情動、心やスピリチュアリティを含む非常に広い活動として解釈されている。・・・(中略)・・・。学習の多元的性質は、学習へのいっそうホリスティックなアプローチを取ることに解釈されている (p.136)。

固定的なカリキュラム志向的な学習、公式の学歴や単位を強調するより、成人学習の大多数を占めるノンフォーマル学習やインフォーマル学習をもっと目に見えるものにしていくことが重要だろう。(p.115)

成人期の学習は、生きてきた経験と一体化した関係にあるので、基礎教育における学習方法とは異なり、ナラティブ学習や教育的ライフストーリーを活用し、学習者が置かれている文化的状況や生活経験と切り離さずに、それらを含めて研究対象とする事例研究の蓄積が必要である。

現代社会においては、少子高齢化や未曾有の災害等によって、看護に対する国民のケアニーズが増大しており、マンパワー不足を補うためにも、急激な医療情勢の変化に対応できる一人でも多くの看護職者の育成が急がれている。

日本における看護教育の現状は、教育背景が非常に多様であるにもかかわらず、取得できる免許が、看護師、准看護師、保健師、助産師に限られている。また、免許取得後の看護実践能力の維持・向上については、各施設で行われているクリニカルラダー制度（臨床看護実践能力習熟段階制）による継続教育によって推進されている。クリニカルラダー制度とは、一般に、臨床において、パトリシア・ベナーの理論（ベナー、2001、2010）に基づき、新人、一人前、中堅、達人という4段階（ラダーレベル）を設定し、各自が自己の学習課題を明確にした上で、梯子（ラダー）を上るように学習することを支援する制度である。各病院の特性により教育内容は多様であり、各病院看護部の教育担当管理者や教育委員会が企画・運営・研修講師・評価を行うことが多い。また、ライフ

ヒストリーから見た看護実践能力であるコンピテンシーの獲得過程(古城, 2003; 田中・小野・小西, 2005; 杉谷, 2004)や, 看護実践能力を育成するためのリフレクションの必要性に関する先行研究等(バーンズ, 2000; 堀井, 2011; 本田, 2001; 本田・小原, 2009; 池西・田村・石川, 2007; 上田, 2012; 東, 2010)はあるが, 教育背景が異なる一人ひとりの看護師が, どのような学習経験を積み重ねて看護実践能力を保持し, 継続的な学習を行いながらキャリアアップをしているのかという実態については明らかになっていない。

そこで, 顕在化されにくい個人が体験している意味世界を読み解く方法であるライフストーリー・インタビュー法(桜井・小林, 2010)を用いて, 学習者個人が置かれている文化的状況や生活経験と切り離さずに, 専門職業人としての継続的な学習の本質を探究することを目指して本研究に取り組んだ。

## 2. 研究目的

本研究の目的は, 熟練看護師のライフヒストリーを分析し, 継続的な学習意欲を保持する過程を明らかにした上で, その学習の本質を「自己・非自己循環理論」(村瀬, 2000)から検討することである。

## 3. 研究枠組としての「自己・非自己循環理論」

「自己・非自己循環理論」は, 2000年に村瀬雅俊によって提唱された統一生命理論である。その特徴は, 生命を要素に還元するのではなく, 自ら閉じた構造をとる「自己」が, 外界である「非自己」と循環する要素過程, すなわち, 「自己・非自己循環過程」に還元して捉える点にある。生命過程は入れ子構造であるため, 部分としての要素過程が「自己・非自己循環過程」であるならば, 全体の構造も「自己・非自己循環過程」となる。

この生命理論を研究枠組として用いることにより, 次のような可能性が考えられる。

- ①生成・発展していく過程と消滅・崩壊していく過程とが対立的に共存するという視点に立てるため, 否定的な現象の深層に肯定的な現象を想定できる可能性や, 学習過程における失敗体験を成功体験に変換できる可能性が広がる。
- ②「発展—崩壊」という局所的・一時的な生命過程を, 全体的・長期的には螺旋的に循環する歴史的過程として捉えることができるので, 生活過程で遭遇する苦悩や経験を人生(歴史)の中に意味づけできる可能性が開ける。
- ③対立的共存による認識の発展によって, 経験を外在化して現象として学び,

さらに外在している知識や現象を内在化して、その本質をとらえることの繰り返しにより、認識の変容・発展及びメタ認識を促す可能性が生まれる。

## 4. 研究方法

### 4.1. 研究デザイン

ライフストーリー・インタビュー法を用いた質的研究

### 4.2. 研究対象者

民間病院に勤務する資格取得後 40 年の熟練看護師 1 名

### 4.3. 研究期間

平成 X 年 1 月～3 月

### 4.4. データ収集方法

研究の趣旨と倫理的配慮を研究対象者に説明し、研究参加の承諾を得た上で、A 氏に対し、ライフストーリー・インタビューを実施した。面接は静かな個室で 2 回実施し、面接内容は了解を得て音声を IC レコーダーに録音し、面接時の様子についてはフィールドノートに記録した。2 回目の面接は、1 回目の面接の補足を中心として実施した。

### 4.5. データ分析方法

録音した内容に基づき逐語録を作成し、学習を継続するきっかけとなった経験を中心として、ライフストーリーを再構成して質的に分析し、その結果について「自己・非自己循環理論」から検討した。

## 5. 倫理的配慮

研究を始めるにあたっては、協力施設の倫理委員会に研究計画書を提出し、承認を受けた。研究対象者となる熟練看護師の選定は、臨床経験が十分にあり、自己の体験を十分言語化できる看護師で、権利擁護者の立場としての部局長の推薦を受けた資格取得後 40 年程度の看護師とした。研究対象候補者に対し、研究の趣旨について文書を用いて説明した上で、研究参加及び中断の自由を保障し、研究参加を中断した場合も不利益をこうむらないこと、プライバシーの保護を遵守することを約束し、研究参加及び研究発表・論文作成について同意を得た。また、面接後に作成した逐語録に目を通してもらい、公表を避け

たい内容を削除してもらった上でデータ化した。

## 6. 研究結果

### 6.1. 研究対象者の概要

A氏, 65歳, 女性で, 15歳から65歳までの50年間のライフヒストリーを研究対象とした。

- 15歳: 看護学校に合格するが, 父親の死によって進学を断念. 調理などの仕事をしながら, 百科事典で勉強
- 20歳: 准看護学校へ進学し, 准看護師資格取得, その後定時制高校に編入
- 25歳: 結婚するが1年後に夫が死亡. その後, 大学の保育科(二部)に進学. 保母資格, 幼稚園教諭免許取得. 統合教育をしている幼稚園で14年保育経験をする中で大学通信教育課程に編入し8年間在籍後に卒業
- 38歳: 再婚し, 翌年男児出産, 調理師免許取得. クリニックに准看護師として1年間勤務
- 43歳: 民間病院に准看護師として就職. この間, 身体・知的障害者の施設に研究生として1年間学ぶ. レクリエーションインストラクター, 福祉インストラクターの資格取得, 病院内の音楽療法的活動に参加
- 49歳: 難病病棟に勤務異動
- 52歳: ケアマネージャーの資格取得
- 56歳: 精神科病棟へ勤務異動
- 59歳: 看護大学通信教育課程に入学し, 2年後に看護師免許取得
- 65歳: 退職後も, パート看護師として精神科急性期治療病棟で勤務し, 実母の介護をしながら福祉系大学の精神保健福祉士のコースで学んでいる

### 6.2. A氏のライフヒストリー

第1回面接は3時間で, 第2回面接は1時間45分であった。

A氏の50年間のライフヒストリーの中心的なテーマは, 「人生の流れに逆らわず自由に学べる幸せ」であった。

A氏のライフヒストリーを, 学びの内容の変化という視点から, ターニングポイントとなる時期を見出し, 区切ってみると, 第I期~第X期の10期に分けられた。以下に, 各期における学習意欲を保持するきっかけとなった経験と学習内容について示す。

**【第Ⅰ期】働きながら学べる機会を待つ時期**

家族構成員の変化により学校教育を受ける機会を延期せざるを得なかったが、その変化を受け入れ、学校で学びたい気持ちを百科事典で勉強することで昇華させ、他の人に負けない大人になろうとしていた時期である。

15歳の時に父がなくなり、中学卒業後は就職組だった。母が看護師であった関係で、もともと看護師という仕事には興味があった。国立の看護学校に合格していたが、母が入学に反対した。反対の理由は、「看護師は料理が下手だし、万が一、犯罪に巻き込まれたりしたら大変だから、行きたいなら20歳すぎにしないさい。学校は逃げないから」ということだった。よくわからないけれど、20歳過ぎならいいんだと考え働いた。小学館の百科事典を全部読んで覚えて、他の人達に負けない大人になりたいと思っていた。

**【第Ⅱ期】自分のやりたい勉強を始めることができた時期**

晴れて学べる機会を得て、教師に温かく見守られる中で自分のやりたい勉強がやれるという気持ちを持って学んだ時期である。その後の肢体不自由児への援助経験から保母の仕事にも魅力を感じて勉強したいと考えた。

晴れて20歳になった時、‘ここからは私の番’という気持ちで、地元の病院で5年間働きながら准看護師の学校で勉強した。この看護学校ですばらしい先生との出会いがあった。私は中卒で、年をとってから入学したので温かく見守ってもらった。自分のやりたいことができる、勉強したいことができるという気持ちが大きかった。卒業後、定時制高校に進んだ。勤務していた病院の院長が養護学校の校医をしていて、肢体不自由児の診察介助をさせていただく中で、保母の仕事にも魅力を感じた。

**【第Ⅲ期】2つの職業人を目指して学んだ時期**

看護師と保母という2つの職業人を目指して学んだ時期である。資格取得後の就職は保母を選択するが、その中で、看護師としての学びを活かした統合教育に取り組む。

看護と保育が両方できる人を目指したいという気持ちだった。ピアノの練習を始め、大学の二部に入学して、保母の勉強や幼稚園・小学校教諭の免許を取得した。資格取得後、幼稚園に就職した。就職した幼稚園では怪我や脱臼が多く、ここで看護師としての経験が役立ち、看護の勉強をしてきてよかったと思った。とにかく仕事

が楽しくて、これが天職だと思っていた。この時は、看護に再び戻るとは思わなかった。幼稚園では、園長先生が学ぶことを応援してくれ、統合教育をする中で自閉症や難聴の子ども達を担当した。その中で、子ども達が自閉症の子どもができるようになったことを私に報告してくれるようになった。「先生、〇〇ちゃんが、△△できたよ」とか、障害のある子どもがいることは、他の子ども達の発達に影響するんだなと思い、私が意図しない喜びを他の人が運んでくれたと思った。

#### 【第Ⅳ期】病院で看護の再勉強

天職だと思った幼稚園での仕事も結婚や転居・出産により断念せざるを得ず、近所の病院に就職し、看護の再勉強をすることになった時期である。病棟の学習会に積極的に参加し、市販の本を買って夢中で勉強し、忙しくても仕事をしながら学べることの嬉しさと有難さを感じていた。

再婚し転居したために勤務先だった幼稚園が遠くなり、他のスタッフに迷惑をかけたくないという気持ちから、思い切って退職した。翌年、出産。子どもを保育園に預けて自分も就職したいと希望したら、同じ職場ではだめだと言われ、園医のクリニックを紹介されて看護職として1年間勤務した。ここで、漢方の勉強をさせてもらった。さらに、実母の近くに転居して、近くにあった民間病院の老人内科病棟に就職した。私は、看護師としての臨床経験が少ないので、そのやり方が正しいと思っていたが、他の病院から来た看護師からいろいろな看護方法を教えてもらい、勉強が必要だと思った。夜勤明けでも病棟の学習会にはできるだけ参加して、市販の本で勉強しながら夢中で働いた。仕事は忙しいけれど、学べるのが嬉しくて、嬉しくて・・・仕事をしながら勉強できる有難さを感じていた。

#### 【第Ⅴ期】保育を活かした看護実践を行った時期

認知症の患者さんを看護する中で、「生きることを楽しめる援助をしたい」という医師の言葉に触発され、偶然めぐってきた音楽療法の研修参加をきっかけとして、保母の経験が活かせることに気づき、仲間とともに音楽療法を取り入れた援助方法を考案し実践する時期である。その過程で「やってきたことが無駄になることはない、看護ってトータルなもの」という気づきを得ている。さらに専門職として、レクリエーションや福祉のインストラクターの資格を取得するために勉強し、障害児の通う施設での研究生として、ノーマライゼーションなどについて学んでいる。



## 熟練看護師のライフストーリーにおける学習意欲を保持する過程

認知症の患者さんについて、ある医師が「ここに入院してきて薬でよくなることは限られている。元気な時に生きることを謳歌する、生きることを楽しめる何かをしてあげたい」と常に言っていた。その頃、音楽療法の研修があり、正看護師のピンチヒッターとして参加した。「これって、私が今まで一杯やってきたことじゃない？」という気持ちで、違和感なく研修に参加した。その後、音楽療法を取り入れた看護方法を仲間と一緒に立ち上げ、病院の祭りでの創作ダンスや人形劇などを11年間続けた。その過程で、話もできず胃瘻増設していた患者さんが、歌を通して口から食べられるようになり話ができるようになったという看護経験をした。このような経験から、やってきたことが無駄になることはないんだ、看護ってトータルなものなんだなあと考えた。その後、レクリエーションインストラクターと福祉インストラクターの資格を取得し、18歳以上の人が通う障害者施設の研究者として1年間学んだ。そこでは、ノーマライゼーションや同性介護、介護者の人権の擁護などについても考えさせられる経験をした。

### 【第Ⅵ期】精神科看護の再勉強をする時期

精神科病棟に勤務異動したことをきっかけに、精神科リハビリテーションの研修に参加し、SST (Social Skills Training: 社会生活技能訓練) を積極的に看護援助に取り入れるために学び続ける時期である。

精神科病棟に勤務異動があった。当時は、保護室にまだ鉄格子が入っている時代だった。この人たちに何か喜びを感じてもらえる援助はないかなあと考えた。一人ひとりにスポットが当たる時間を作ることができればという気持ちだった。精神科リハビリテーションの研修として、SSTの研修に参加した。その中で、私は精神科看護のことを何もわかっていないという気持ちになり、精神科看護の勉強をしたいなと思った。また、病棟のSSTの係りとなり、SSTをやるからには勉強しなくちゃと思って、本を買ったり、これまでやってきた人に話を聞いたりした。レクリエーションを行う過程では、専門的学びを深めている作業療法士から多くのことを学ばせてもらった。

### 【第Ⅶ期】院内継続教育で学びを振り返る時期

大学で看護学を学んだ看護師と一緒に仕事をする中で、精神科看護の奥深さについて開眼するとともに、院内継続教育制度が導入されて開催されるようになった研修に積極的に参加する時期である。病院に居ながらにして学べる有難さを思い、看護研究に挑戦する機会を得たことで、看護実践の長期に



わたる歴史的蓄積に感動した。

M 看護師 (研究者) が私が勤務していた病棟に入り、一緒に看護実践をする過程で、精神科看護について本当はこういうものなのかということを知った。精神科看護が、教養や知識に裏打ちされた看護だということや、患者さんの思いに添った共感の仕方、人間と人間の関係、心のポジショニングなどについて学ぶ機会を得た。そして、M 看護師が教育師長になり、院内に継続教育制度を入れてくれたので、院内で居ながらにして学ぶことができたことは有難かった。継続教育の一環として、看護研究で服薬自己管理のことで文献を集めてみて、これまでこんなに研究をやってきているんだなあ、長い間の看護実践の歴史的蓄積に感動した。患者さんが、この病棟に入院してよかったなあと思える機会になればよい、人生の中で役立つことをもらったという思いになってほしいと思って学習を続けながら日々の援助を行った。

#### 【第Ⅷ期】 正看護師の道を目指して再勉強に挑戦する時期

臨床経験を重ねても「こんな自分でいいのかな」と悩んでいた時に、正看護師への進学コースができたという情報を知って受験。誰にも遠慮せず勉強できる喜びとわくわくする学びへの思いに満たされながら、同志の仲間の存在、家族の容認、職場の理解に支えられ、モチベーションを維持する時期である。この過程で、何でも体験してみると、その体験が後に生きることを痛感している。

日本で3校の進学コースができるということを知った。准看護師として経験年数が経つのに、エビデンスがないままに仕事をしている自分がいることに気づき、こんな自分でいいのかなと考えるようになっていた。息子が看護学校に入ったので、私だって入れる、私は実践をしてきているのだからと思ったことも影響していると思う。3000人の受験者の中で、150人の中に入った。嬉しくて、嬉しくて、誰にも遠慮しないで勉強できるという喜びで一杯だった。職場の上司が「スクーリングは研修で出してあげるから頑張ってくれ、こんなにして行けるならば、もっと勉強することができる」と思い、とても嬉しかった。学びの過程では、自分が見よう見まねで実践していたことに、こんな根拠があるんだなと思った。何でも体験できる時にやってみることが大切だな、自分の中では活きていると思っていない体験でも、後で活きるのだと思った。そして、何より自由に勉強できることの幸せ、家族の容認、職場の配慮があったので、学習に対するモチベーションはあがった。この年になって学べたことは、財産を無料でいただいたような気持ち。学ぶ機会は、自分の学びたい

という思いがあれば必ずチャンスが来る。やれる時がその時だと思う。スクーリング中は、飛行機で通った。大学は遠方だったが、知ることの楽しみでワクワクしていて、一度も苦痛だと思ったことはなかった。空港で仲間と落ち合い、助け合い、励まし合って勉強した。今でもその時の仲間とは交流を続けている。宿泊先のホテルでは、勉強用の机やスタンドを特別に用意してくれた。学ぼうとする人をサポートしてくれる地域の人の心遣いが嬉しかった。卒業式には夫も参加してくれ、共に喜びを分かち合えて嬉しかった。

### 【第Ⅸ期】母の介護経験から福祉の勉強へと進む時期

自分の学びを最大限、家族へ還元したいと考え、実母の介護を行う時期である。その過程で、精神保健福祉士の役割の大切さに気づき、勉強を始める。近い将来、「地域で生活する人への援助に役立てたい」と思っている。

自分が経験してきたことや学んできたことを、家族へ最大限、還元したいと思う気持ちから、高齢の母の介護を行っている。その中で、精神保健福祉士に大変お世話になっている。母の介護を通して、精神保健福祉士の役割の大切さに気づき、福祉に関する知識が必要だと思ったので、その資格を取るための勉強を始めた。そして、看護師としての援助に加えて、地域で生活する人に対する援助の中で今の学びを役立てていければいいなあと思う。縁があって、こういう仕事についたのだからと考えている。

### 【第Ⅹ期】出会う人は皆人生の師で無駄な経験はないと振り返る時期

出会う人は皆、人生の師であり、この人の良いところを学びとりたいという気持ちがあり、前に進むエネルギーになっていること、自分が経験したことは必ず役立ち無駄な経験はないと思っている時期である。また、この研究に参加することにより、“語り”を通して自分自身の人生を振り返ることができたことも、学びにつながったと考えている。

卑屈になっているわけではないけれど、私にとって、出会う人は皆、人生の師だと思う。自分よりは、誰もが偉く見えてしまうから。「人、我より皆、偉く見える」(啄木)という感じ。そして、それが、自分が前に進むエネルギーにもなっている。この人のいいところを学びとりたいなあ。自分に足りないものが、この人には一杯あるからと感じるのが元だと思う。

私の人生って偶然の人生みたい。偶然出会って、偶然そちらの方に行っている。

流された人生とは思わないけれど、何か目に見えないものに動かされているような気がする。学ぶことに対しては食欲です。勝手に盗んじゃうとか。最終的には失敗したことも、自分で経験したことは必ずどこかで役に立つ。無駄なことってないよと思うのね。この研究に参加したことも、それをきっかけにして、自分自身の人生を振り返ることができたので、とてもよかったと思う。

## 7. 考察

A氏は、自分を取り巻く生活環境の変化をありのままに受け入れ、その変化に応じて学習する分野や目標を変えながら、学習意欲を保持し、前向きに学び続けようとしていた。その過程で、異なる分野の学習をどのように活かすかという葛藤（対立）を抱える5つの局面があり、両者が共存できる道（対立的共存）を選択することで学習意欲を保持していた。5つの局面とA氏のライフヒストリーにおける第Ⅰ期から第Ⅹ期との関係は以下の通りである。

局面1は、A氏のライフヒストリーの第Ⅰ・Ⅱ期に当たり、働きながら5年間学べる機会を待ち、自分のやりたい勉強を始めることができた時期である。百科事典から学んだ一般教養から、看護という専門的な学習を選択することで、自分のやりたい学習内容が焦点化され、意欲を持って学習に取り組めた局面である。

局面2は、A氏のライフヒストリーの第Ⅲ期で、2つの職業人を目指して学んだ時期である。A氏は、局面1で准看護師の教育を受け資格を取得するが、その過程で、保母の教育にも魅力を感じた。そこで、幼稚園教諭・小学校教諭の資格も取得するべく大学で学ぶ。看護と保育という異なる分野の学習どのように活かすかという葛藤の中で、卒業後の職業としては保育を選択し、保育の中に看護の学習を取り入れた統合教育を行う局面である。

局面3は、A氏のライフヒストリーの第Ⅳ・Ⅴ期である。家庭の事情から職業として看護を選択する。そして、看護の中で保育の学習を活かした音楽療法やレクリエーションを取り入れた援助を行う局面である。

局面4は、A氏のライフヒストリーの第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ期である。勤務異動により、一般的な看護から精神科看護という専門分野の看護を学習しなければならない立場に立たされ、新たに学ぶ必要性が生じる。精神科看護の学び（SSTなど）を通して、これまでの看護を振り返り、身近な指導者に支えられて看護研究に挑戦したり、正看護師を目指して進学する局面である。

局面5は、A氏のライフヒストリーの第Ⅸ・Ⅹ期である。看護の中に社会福祉の知識が必要であることに気づき、新たに精神保健福祉士の資格取得に向け

た学習を始め、出会う人を皆、人生の師と考えて学び続ける局面である。

これらの関係を構造化してみると、図1のようになる。つまり、A氏のライフストーリーにおいては、異なる分野の学習を学びたいというA氏の認識内部の葛藤が生じている5つの局面が認められた。各局面で、それらの葛藤に折り合いをつけることができるような職業や経験を選択することにより、さらに高次の認識に発展する過程を繰り返し、学習意欲を保持していることが明らかになった。また、A氏の学習過程は、学習した経験の本質を理解するための内在化のプロセスと、その学習経験の本質から新たに体験する現象を理解するための外在化のプロセスが循環していた。この学習経験の本質を理解するための内在化のプロセスは、リフレクションの概念である「行為の中の省察」(梶山, 2009) であると考えられる。

さらに、その学習過程において、A氏の認識は「看護ってトータルなもの」、「失敗したことも自分で経験したことは必ずどこかで役立つ」など、発展していた。これは、異なる認識が対立的に共存することによる認識の発展(村瀬, 2001) と捉えられる。また、これは、薄井(梶山, 2009 ; 薄井, 1974) が「実践者である専門家としての看護職の学習は、自らの状況との省察的な対話能力である認識能力を鍛えること」と述べていることと同型であると考えられる。

このような看護師の認識の発展過程は、病気を持つ人が病を受け入れ、病の経験の意味を内在化し、新たな人生を描くことで病から回復する過程と同型である(村瀬, 2006, 2012, 2012)。また、学校教育においても、学習は、異なる学習経験の内在化と、その内在化した経験を次の学習で活かすという外在化のプロセスを繰り返していることから同型であると考えられる(オリヴェリオ, 2005)。さらに、この過程は、人類の叡智の歴史である科学史の発展過程(ピアジェ・ガルシア, 1996) とも同型であると考えられる。

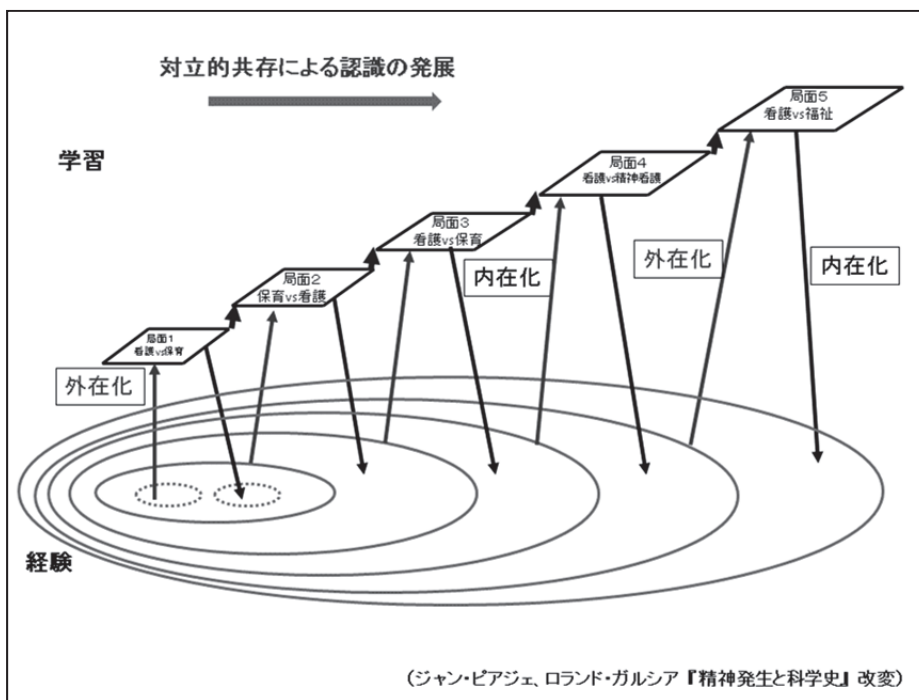


図1 A氏の学びの過程

また、「自己・非自己循環理論」の視点から、A氏のライフヒストリーにおける学習過程を構造化してみると、図2のように学習過程を螺旋型として描くことができる。この図は、図1を90度回転したものである。A氏の学習意欲を駆動するエネルギーは、「出会う人を皆、人生の師」と考え、その人から学びとりたいという気持ちであり、人生の流れに逆らわず、偶然の体験(人との出会いを含む)を一旦外在化し、「自由に学べる幸せ」を感じて、その学びを内在化することであった。そして、さらに内在化した学びを経験として、次の外在している学びの機会にチャレンジすることを繰り返していた。この過程は、「内」(自己)と「外」(非自己)の循環過程として捉えられる。この「自由に学べる幸せ」が、螺旋型学習の中心軌道であり、学習意欲を保持するエネルギーであると考えられた。

また、A氏の50年間のライフヒストリーにおいて、常に学習意欲を支えたのは、仲間の存在、家族の容認、職場の理解であると捉えられた。

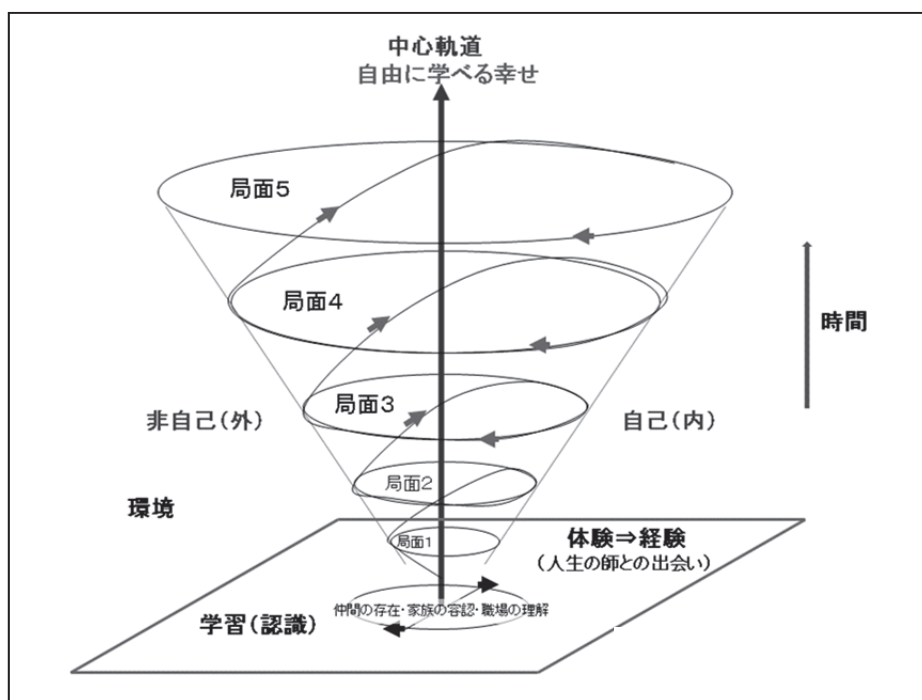


図2 A氏の学びの過程

このように、A氏における学習意欲を保持する過程の本質は、「自己・非自己循環理論」の視点から捉えてみると、「自己」と「非自己」が螺旋を描きながら循環し、各局面で対立する異なる分野の学習や新たな学習経験によって生じた認識内部の葛藤を共存させる方向で統合しながら進む過程であると捉えることができた。

## 8. 結論

A氏の50年間のライフヒストリーにおける継続的な学習意欲を保持する過程は、「自己・非自己循環理論」の視点から捉えてみると、人生の流れの中で「自己」と「非自己」が螺旋を描きながら循環する過程として理解することができた。そして、その中心となる軌道は、「自由に学べる幸せ」であり、その過程を支えるのは、仲間存在、家族の容認、職場の理解であると捉えられた。

また、A氏は、ライフヒストリーにおける学びのターニングポイントとなる各局面で、異なる学習経験（学んだ経験や学ぶ過程）をどのように活かすかという葛藤を抱え、その解決として両者の学習経験を共存させる道を選択する

ことにより学習意欲を保持し、統合的に学び続けていることが明らかになり、その過程でA氏の認識が発展していた。

本研究は一事例を対象とした研究であるが、看護学だけでなく、教育学においても成人学習（メリアム, 2010）の理論生成につながる実践例であると考えられる。

A氏のように、生涯にわたって自己研鑽を重ねながら継続的に学び続け、キャリアアップする看護師を育成するための教育的環境を整えることや（森本・鈴木・凧・和田・大納・近田, 2004；勝原, 2009；シャイン, 2003；金井, 2002）、学習者個人が置かれた文化的状況や生活環境と切り離さずに事例研究を積み重ねることは、今後の看護教育における課題である。

## 9. 謝辞

お忙しい中を、本研究にご協力いただいた関係諸機関の皆様、勇気をもって貴重な体験を語って下さったA氏に深く感謝致します。

## 参 考 文 献

- ベナー, P. (2001) / 井部俊子監訳：ベナー看護論 新訳版 初心者から達人へ, 東京：医学書院(2005)
- ベナー, P., サットフェン, M., レオナード, V., デイ, R. (2010) / 早野 ZITO 真佐子訳：ベナー 「ナースを育てる」, 東京：医学書院(2011)
- バーンズ, S. & バルマン, C. 編(2000) / 田村由美, 中田康夫, 津田紀子監訳：看護における反省的实践—専門的プラクティショナーの成長, ゆみる出版(2009)
- 東めぐみ：看護リフレクション入門, ライフサポート社 (2010)
- 本田多美枝：看護における「リフレクション (reflection)」に関する文献的考察, *Quality Nursing*, 7(10), 53-59 (2001)
- 本田芳香、小原泉：がん看護実践能力を育成するためのリフレクションプロセス, *自治医科大学看護学ジャーナル*, 7, 13-24(2009)
- 堀井湖浪：精神科に勤務する看護師のリフレクションのプロセスに関する研究, *日本赤十字看護大学紀要*, 25, 32-42(2011)
- 池西悦子、田村由美、石川雄一：臨床看護師のリフレクションの要素と構造—センスメイキング理論にもとづいた‘マイクロモメント・タイムラインイ



- ンタビュー法’の活用一, 神戸大学保健学科紀要, 23, 105-126 (2007)
- 金井壽宏: 働くひとのためのキャリア・デザイン, PHP 新書, 東京: 株式会社 PHP 研究所 (2002)
- 勝原裕美子: 看護師のキャリア論, ライフサポート社 (2009)
- 古城幸子: 専門教育を受けた高齢女性のライフヒストリー—生活構造分析を用いて—, 新見公立短期大学紀要, 24, 131-137 (2003)
- メリアム, S. B. 編 (2008) / 立田慶裕, 岩崎久美子, 金藤ふゆ子, 荻野亮吾訳: 成人学習理論の新しい動向 脳や身体による学習からグローバリゼーションまで, 東京: 福村出版 (2010)
- 森本弥生、鈴木貴世美、風真紀子、和田加代子、大納庸子、近田敬子: 中高年看護師の自己成長に教育的機会が与える影響, 日本看護学会論文集: 看護管理 34, 204-206 (2004)
- 村瀬雅俊: 歴史としての生命, 京都大学学術出版会 (2000)
- 村瀬雅俊: こころの老化としての「分裂病」—創造性と破壊性の起源と進化, 講座『生命』, 5, 220-268, 河合出版 (2001)
- 村瀬智子: 「自己・非自己循環理論」を基盤とした看護学における新理論の構築に向けて (第一報), 千葉看護学会会誌, 12(1), 94-99 (2006)
- 村瀬智子: 「自己・非自己循環理論」を基盤としたうつ病をもつ人に対する看護援助モデルの構築 (第一報) —うつ病をもつ人の認識の特徴—, 近大姫路大学紀要, 第4号, 1-11 (2012)
- 村瀬智子: 「自己・非自己循環理論」を基盤としたうつ病をもつ人に対する看護援助モデルの構築 (第二報) —うつ病をもつ人に対する看護援助の性質—, 近大姫路大学紀要, 第4号, 13-21 (2012)
- オリヴェリオ, A. (1999) / 川本英明訳: メタ認知的アプローチによる学ぶ技術, 大阪: 創元社 (2005)
- ピアジェ, J. & ガルシア, R. (1983) / 藤野邦夫, 松原望訳: 精神発生と科学史知の形成と科学史の比較研究, 東京: 新評論 (1996)
- 桜井厚・小林多寿子編著: ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門, せりか書房, (2009)
- シャイン, E. H. (1990) / 金井壽宏訳: キャリア・アンカー 自分のほんとうの価値を発見しよう, 東京: 白桃書房 (2003)
- 杉谷佐久良: 看護師のライフヒストリーから見るコンピテンシーの獲得過程, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 29, 198-204 (2004)

梶山委都子：二つの実践の認識論による生涯学習の検討：薄井坦子『科学的認識論』と D. A. ショーン『省察的实践とは何か』をめぐって, 千葉看護学会会誌, 15(2), 46-52(2009)

田中美延里, 小野ミツ, 小西美智子：先駆的な公衆衛生活動を展開した保健師のキャリア発達—離島の町の保健師のライフヒストリーから—, 広島大学大学院保健学ジャーナル, 5(1), 16-27 (2005)

上田修代：地域看護実践における保健師のリフレクションを構成する概念の解明, 千葉看護学会会誌, 18(1), 45-52 (2012)

薄井坦子：科学的看護論, 日本看護協会出版会(1974)